令和５年度
劇場・音楽堂等活性化・ネットワーク強化事業
（地域の中核劇場・音楽堂等活性化）
成果報告書

団体名		公益財団法人神戸市民文化振興財団
施設名		神戸文化ホール
助成対象活動名		普及啓発事業
内定額(総額)		8,330 （千円）
	公演事業	0 （千円）
	人材養成事業	0 （千円）
	普及啓発事業	8,330 （千円）

１．事業概要

（１）令和５年度実施事業一覧【普及啓発事業】

番号	事業名	主な実施日程 主な実施会場	概　要 （演目、主な出演者、スタッフ等）	入場者・参加者数（人）	
1	神戸市混声合唱団合唱コンクール課題曲コンサート	R5 年 4 月 23 日 神戸文化ホール大ホール	2023 年コンクール課題曲/佐藤正浩（指揮）、藤木大地（カウンターテナー）、神戸市混声合唱団	目標値	600
				実績値	359
2	神戸文化ホール ウェルカムジャンボリー2023「コブホであそぼ！」	R5 年 6 月 22 日 神戸文化ホール大ホール	①パントマイムワークショップ（講師:いいむろなおき他）②パフォーマンスコンサート（出演:池田安友子、いいむろなおき他）③絵本 de クラシック「ブレーメンの音楽隊」　④ミニバックステージショー　⑤野外マルシェ	目標値	880 （①30②100③④650⑤100）
				実績値	約 1440 （①21②約 150③692④約 40⑤約 530）
3	リラックスパフォーマンス形式の「こどもコンサート」と関連ワークショップ	R5 年 7 月 23 日他 神戸文化ホール他	①アウトリーチ公演 ②ワークショップ ③コンサート 木許裕介（指揮）、安永早絵子（打楽器、ナビゲーター）、神戸市室内管弦楽団、神戸市混声合唱団/「遠足」をテーマに合唱と管弦楽、室内楽で構成したプログラム	目標値	コンサート 600、 アウトリーチ公演 420、 ワークショップ 20
				実績値	コンサート 671 名、 アウトリーチ公演 520 名、 ワークショップ 16 名〞
4	「音楽のまち神戸」スペシャルコンサート＆夏休み自由研究ワークショップ（神戸国際フルートコンクール連携企画）	R6 年 2 月 18 日 神戸文化ホール大ホール他	ワークショップ講師：永松ゆうこ コンサート出演:酒井麻生代（フルート/作曲）、広瀬未来（トランペット/作・編曲）、中島徹（ピアノ）萬恭隆（ベース）、森下啓（ドラム）	目標値	550（ワークショップ参加者 50、コンサート入場者 500）
				実績値	496（ワークショップ参加者 20、コンサート入場者 476（一般 398 名；25 歳以下 25 名；18 歳以下 53 名））

※ …新型コロナウイルス感染症の影響があったもの

２．自己評価

（１）妥当性

自己評価
ミッション（社会的役割等）・ビジョンや地域の特性等に基づき、事業が適切に組み立てられ、当初の予定通りに事業が進められていたか。
神戸市の基幹文化施設・芸術文化の創造発信拠点である神戸文化ホールは、①「神戸からの創造・発信を行う」、②「地域社会の絆をつなぐ」、③「人々に活力を与える」、④「学ぶ、トライするを支える」をミッションに、市民の文化振興に資する事業を展開している。 また、古くから国際都市として発展してきた神戸は、全国的に高い知名度を有するが、近年では他政令都市に比べ人口減少率が高く、「神戸ブランド」を強化し「若者に選ばれるまち」となることが求められている。令和 9 年度以降には、都心三宮の再整備と並行して新・神戸文化ホールを開館（現在のホールから移転）する予定で、新ホールに向けて「創造的人材育成と活用」「普及啓発拠点」といった機能も強化していく必要がある。 令和 5 年度の助成対象事業は、これらのミッション遂行の中心的な取り組みとして、① 社会のあらゆる立場、事情にある方々へも文化芸術の力を届ける ②演劇、舞踊、音楽、伝統芸能、芸能などの優れた作品に観客・聴衆が気軽にアクセスできる といった 2 点に重点を置き、適切な事業計画を組み立てた。 いずれの事業も概ね当初の予定通りに事業計画を実施できたため、当劇場の社会的役割や地域の特性等に基づいた事業の実施ができたものと判断している。
助成に値する文化的、社会的、経済的意義等が継続して認められるか。
普及啓発事業について４事業を実施し、広範なエリアから 3,502 名に来場・参加いただいた。 事業 1 では、359 名の来場者を迎え、アンケート回答数（104）のうち、「とても良かった」77（74%）、「良かった」14（13%）、「まあまあ」「やや不満」「不満」が 0 という大変高い評価をいただいた。このような成果が来場した学生を含むアマチュア合唱団の練習目標となり、地域の演奏水準をあげたという文化的意義があった。また、コンサートで収録画像 8 作品分を動画投稿サイトで公開したところ、もっとも再生回数が多かった「Chessboard」の視聴回数は 379,972 回（5 月 28 日現在）であり、88%が日本国内で視聴されていたという分析結果から、全国的な合唱文化の振興に寄与したという社会的意義があったと考えられる。 事業 2 では、舞台芸術の愛好者や日頃からホールに馴染みのある人たちだけではなく、年齢や性別や障がいの有無はもとより、個人を取り巻く社会的状況に関わらずあらゆる人々がホールに集い、交流し、文化芸術を身近に楽しく体験するフェスティバルを目指し、全 5 企画を実施。子育て支援施設や地域内の外国人コミュニティなどにも積極的に情報提供し、最終的に神戸市内在住者を中心に、1440 名の来場者を迎えることができた。結果として、アンケート回答者（142 名）のうち、年代は 10 代以下と 30～40 代が全体の 71%を占め、初来館者が 34%、再来館希望者が 100%、「たいへんよかった」「よかった」と回答した人が 100%、「初めての体験や発見があった」と回答した人が 98%となり、ファミリー層を中心に、これまで劇場に足を運ぶことのなかった地域の人々を集客し、芸術文化活動への参加を促進し、劇場での芸術鑑賞のすそ野を広げたという点で、社会的意義があった。 事業 3 では、神戸市内の支援学校 2 校（いぶき明生支援学校、青陽須磨支援学校）、図書館２館（こども本の森神戸、三宮図書館）へのアウトリーチ、研究者（長谷川諒・神戸大学非常勤講師）とのワークショップ実施ということで演奏会の枠を超えた社会包摂、教育普及の活動も行い、社会的意義があった。 事業 4 では、神戸の文化資源である「神戸国際フルートコンクール」（クラシック）と「ジャズ発祥の地」（ジャズ）がクロスオーバーした公演を行った。地域独自の魅力の発信をすることによって、神戸市で行うことの文化的意義を、また、地域社会の共有価値の創出にも寄与したことで一定の社会的意義を果たしたものと考える、また、ワークショップでは、小学生のこどもたちが夏休みの自由研究の課題として取り組める企画であり、地域社会のこどもたちの学習の１つとなったことは当事業が担った社会的意義の大きな部分であった。

（２）有効性

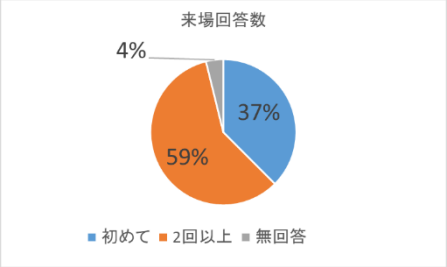
自己評価
目標を達成したか。
事業計画に設定された目標・指標について概ね達成することができた。 ■目標① 社会のあらゆる立場、事情にある方々へも文化芸術の力を届ける。（対象：事業 2～4） ・事業 2 では、パントマイムパフォーマンスを取り入れ、聴覚が不自由な人や日本語に堪能でない人も楽しく鑑賞・参加できるような工夫を凝らした。また、「0 歳から参加 OK」のコンサートでは子育て支援団体などと連携し、運営スタッフの中にサポートや介助のできる人材が支援できる体制を整えた。 ・事業 3 において支援学校のアウトリーチでは学校と調整のうえ、年齢や学級（障害）別に 2 校 6 公演を実施。可能な限り支援学校の普段の生活環境のままで演奏、交流し、会場は声が出る、走り回る等ある種のカオス状態となったが、それを受け入れて音楽家側が楽しむことで初めて参加、鑑賞が可能になる子ども、先生もいた。 ・事業 4 では、同伴者に特別割引価格でのチケット提供を行うユースシートプログラム（小学生から 18 歳以下無料招待）に加えて、無料託児サービスを設けたことで、子育て世代を中心に子どもの年齢に関係なく、家族で劇場に赴き本格的な演奏を鑑賞することを容易にした（全入場者の 21%がユースシートプログラムを利用）。 ■目標②演劇、舞踊、音楽、伝統芸能、芸能などの優れた作品に観客・聴衆が気軽にアクセスできる（対象：事業 1～4） ・事業 1 において通常の公演よりも 10 代以下の来場者が多かった。コンクール課題曲に関心のある層へ合唱の名曲も提供することができた。 ・事業 2 では、公演の数か月前に近隣文化施設でプレイベントを開催した。初めて連携企画をすることになった「NATURE　STUDIO」と「こども本の森　神戸」の客層が、日ごろ文化ホールを訪れている客層のジャンルとは異なっていたため、新たな客層を開拓できた。 ・事業 3 において支援学校での助言をコンサートに活用することで、かなり幅広い年齢、背景の聴衆が一緒に音楽を楽しむことができた。アンケートで「周りを見ると小さな子どもたちが目をキラキラとさせて演奏を見ている姿になみだが出そうでした。」とあり様々な客層を自然と受け入れる公演になっていると思われる。 ・事業 4 では、ジャズコンサートでありながら、クラシック音楽ファンや、あまり劇場に足を運ぶことのない人たちの興味を引き付けるプログラムにすることで、普段であれば選ばない個人の趣向とは異なる公演に足を運ぶことを容易にした。アンケートでは「オーケストラでも聴いてみたい」、「ジャズに興味が湧いた」という意見もあり、ジャンルを超えた観客層の多様化を促す公演になったと考える。 ■指標① 幅広い市民参加を計測（小学生以下の来場者数合計 235 人を「353 人」に増やす。）※対象：事業 2～4 事業 2：260 名、事業 3：272 名、事業 4 ：45 名 ■指標② 文化活動へのアクセス拡大を計測（リピーター（2 回以上）を 26%から「35%」に増やす。）※対象：事業 1～4 事業 1：59%（61/104 名）、事業 2：52%（74/141 名）、事業 3：35%（34/96 名）、事業 4：27%（68/252 名） ■指標③ 情報取得方法のうちのネット関連の比率を 11%から「20%」に増やす。※対象：事業 1～4 事業 1：11%（15/129 回答）、事業 2：21%（30/141 回答）、事業 3：15%（16/106 回答）、事業 4：24%（61/252 回答）

（３）効率性

自己評価
アウトプットに対して、事業期間が適切で、当初の計画通りに進んだか。
令和 5 年度は、いずれの事業も計画どおりに実施、運営することができ、事業の回数、期間ともに適切であった。特に、事業 1 では、要望書に「令和 4 年度の実施において当事者や関係者の助言を取り入れた運営面での工夫（優先入口の設置と動画での事前案内、ロビーでの自由スペースの用意、客席扉の開放や座席の配置、照明の工夫、演奏中の自由な出入り等）を継続しさらなる定着化を図る」と記載したが、そのような案内等を適切に実施できた。その理由として、大学生インターンシップ参加者の増加（令和 4 年度 4 名→令和 5 年度 11 名）が貢献したことが挙げられる。
アウトプットに対して、事業費が適切で、当初の計画通りに進んだか。
いずれの事業も事業費は適切で、全体的に経費の節減にも努めた上で、当初の計画通りに進んだと考えている。

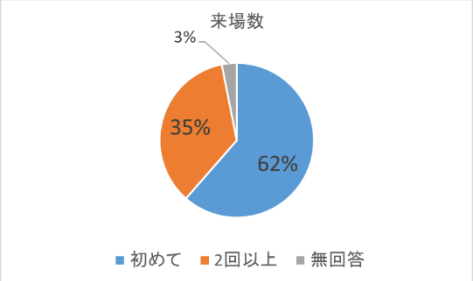
（４）創造性

自己評価
地域の文化拠点としての機能を最大限に発揮する優れた事業であった（と認められる）か。



事業１では、ゲストしてカウンターテナー（藤木大地氏）を起用して、声楽の多彩さを、合唱を楽しむ／たしなむ方々に発見してもらいたいとの企図があったが、公演アンケートにも「カウンターテナー、はじめての経験でした。様々な想いに深くひきこまれました」「藤木さん、歌を聴き色や景色が見えました。心にすっと入ってきました」との狙い通りであった。それに加えて、当財団の文化資源である専属合唱団「神戸市混声合唱団」についても高い評価「さすがプロだと思いました」（公演アンケートより）が寄せられ、6 割近くが常連客という（2 回目以上・左図）地域に根差した合唱団の活動が、新たな音楽体験の提供に寄与したと考えられる。

事業 2 では、地域の拠点劇場として、大ホールを中心に複数の施設を有する強みを生かし、鑑賞型企画から参加型企画まで、施設の特性に合わせた幅広いラインナップを展開した。具体的には、①のワークショップ参加者が②の公園やロビーを使用したパフォーマンスに出演し、それを⑤の公園でのマルシェに立ち寄った来場者が鑑賞するという関連性を持たせ、地域の人々の芸術活動参加体験を促進した。また大ホールで実施した③「絵本 de クラシック」と④ミニバックステージショーでは、楽器紹介コーナーなど参加型企画を設け、能動的な鑑賞体験とともに、芸術文化への理解を深める機会を提供した。（１）妥当性にも記載のとおり、来場者アンケートへの回答者のうち、「たいへんよかった」「よかった」と回答した人が 100%、「初めての体験や発見があった」と回答した人が 98%であり、地域の文化拠点としての機能を最大限に発揮したものと自己評価する。



事業 3 では、令和 4 年度からの新企画シリーズであるため、神戸市室内管弦楽団・神戸市混声合唱団の公演には来場したことがない新規客が過半数を占めた。出演した両団は、神戸市立小学校の全校にアウトリーチ活動として訪問していて、こどものアンケート回答に「小学校で見た人が４にんぐらいいたよ。しってるきょくが 6 きょくぐらいあった。でもしらないがっきがたくさんあった。ふしぎな音がしたりちかくで見たかった」と興味喚起された様子が伝わってきた。大人の方の感想としては「オーケストラの人達まではっちゃけていて、混声の人たちとうしろでおどっていてエネルギーがすごくて、すごくわきあがってくるものがあり楽しくて泣いた。オケの音と声とあまりの迫力で、子供コンサートに来て泣きながら聴いたのははじめてです」との記述があり、楽団と合唱団の両団の合同ならではのパワーが聴衆に強い印象を与えたことが読み取れた。専属楽団を持つ当財団の強みが発揮されたものと思料する。

事業 4 では、神戸ならではの文化「神戸発祥の“ジャズ”」と「世界に誇る“神戸国際フルートコンクール”」の 2 つの音楽文化をクロスオーバーさせた、神戸らしく且つ神戸ならではの企画であった。地域の文化財産を最大限に活用し、ジャズ愛好家・クラシック愛好家を同じ会場に集めることができる企画であること今回の優れた点であると考える。

自己評価
地域の実演芸術等の振興など、地域の文化芸術の発展につながった（と認められる）か。
事業 1 では、聴衆の感慨深いアンケート回答が寄せられた「コロナの長いトンネルを抜けて、やっと聴けました。胸がいっぱい、明日からまた頑張れます」「とても感動しました。人の声、日本語の美しさに改めて気付きました。また聴きに参ります」「声って最高の楽器と！！いつも心に沁みる思いで聞かせて頂いています」「いつも素敵な演奏で心が浄化されています」など、高い技術で作品の真髄を聴かせるプロの合唱ならではの鑑賞のカタルシス効果に触れたことばが散見された。聴衆ひとりひとりが、このようにして生きる力を快復するコンサートは、地域に活力をもたらすものではないかと考える。 事業 2 では、来場者の中心がファミリー層であった。アンケート回答からは、「赤ちゃんも参加できてすごくうれしいです」「小さな子どもを安心して連れてこられる内容で良かった」「子供向け、無料、リーズナブルでうれしい」といったアクセシビリティへの高い満足度や、「想像以上におもしろく、子ども大興奮でした」「舞台裏が見れて楽しかった」「会場全体で楽しみやすいように工夫してくださって良かった」「楽器紹介がおもしろく、子どもにもわかりやすい内容で良かった」「子どもたちにとても良いと思った」など企画内容そのものへの高い満足度が見られ、あらゆる人がアクセスできる広場としての劇場、次世代を担う芸術鑑賞者の育成につながっているという点で、地域の文化芸術の発展に寄与したものと自己評価している。 事業 3 では、「音楽の友」11 月号に「普通のコンサートでは考えられないルールが観客を迎えた。0 歳児からの入場、途中入退場可—開場前、子供の大きな泣き声が会場に響いていた。しかし、オーケストラが《スコットランド交響曲》第 2 楽章を奏でるころ、不思議と会場は静まっていた（略）林光の夢に満ちた世界が混声合唱団の力強い響きとともにステージで創り出される。コーラスのメンバーが手にする森をイメージした布切れに、会場の子供たちは立ち上がり、呼応する。出演者と聴衆との相互交流が自然に形成されていた」（嶋田邦雄）との、型破りなこの企画が狙い通りの「相互交流」という効果を生み、文化芸術の力が地域住民に波及したことを的確にご指摘いただいた。 事業 4 では、特にワークショップにおいて、子どもの主体的な問題解決力を育てるサポートと同時に、音楽への好奇心・探求心を引き出すことができたことによって、次世代の文化芸術の聴観衆、または担い手の育成のきっかけとなったことで地域の文化芸術の発展につながったと考える。アンケートの感想を聞く項目には、ありがちな「楽しかったです。」の記載のみという回答はなく、「少し（弦の）おさえる場所を変えるだけで音が変わっておどろいた」や、「トイレットペーパー（の芯）に穴を空けてストローをつけたらドレミなどの音階になるのがビックリしました。計算で音階が出たのもおどろきでした。」というような驚きや発見が多かったという回答が多数を占めていることからも、前述の点について評価できるものと考える。

（５）持続性

自己評価
事業を通じて組織活動が持続的に発展する（と認められる）か。
（１）事業運営 （公財）神戸市民文化振興財団は、昭和 57 年の団体設立以来、神戸文化ホールの運営を担っており、平成 17 年 4 月より指定管理者制度へ移行後も指定管理者を務め、現在 6 期目も令和 4 年 4 月から 5 年間の指定管理者としての選定を受けている。市内文化施設の管理運営や市の施策目的に沿った文化振興施策を実施してきた実績、ノウハウの蓄積といった強みを活かし、地元アーティスト、地元芸術団体との緊密なネットワークを十分に活用して、神戸の芸術を育成・発信し、優れた文化芸術を市民が気軽に鑑賞できる機会を提供している。 （２）経営戦略 ・神戸市と「令和 5 年度 外郭団体のミッション及び経営改革プラン」を策定し、継続的な経費削減及び官民他各種助成金および企業協賛金の獲得強化、有料観客数の増加など既存収入の増収対策に取り組んでいる。 ・地元企業・団体等 60 社以上が参画し、神戸の芸術文化と才能豊かな若手芸術家を支援するために設立された組織「神戸文化マザーポートクラブ」の事務局を当財団が務めており、共感いただいた事業に対し支援を受けてきており、引き続き当該団体との連携を推進していく。 （３）人事戦略 ・職員は、有期契約雇用職員として採用の後、数年間の実務経験と登用試験により、固有職員に登用 ・兵庫県立芸術文化観光専門職大学から学生をインターンとして受入れ、近い将来の就職先候補としても認識を深めてもらう。同様に令和 4 年度から短期インターンシップ事業としてアートマネジメント人材養成事業を運営し、周辺大学から学生を受け入れている。 ・豊富な経験や実績をもつ専門人材をマネジメント職に配置し、事業運営の強化を図るほか、部署横断型のプロジェクトを形成し、多くのスタッフの知識・経験の蓄積と能力向上を図る（令和 3 年度 2 名、令和 4 年度 1 名、令和 5 年度 2 名） （４）関係者とのネットワークの構築（他館、劇団、地元団体、教育機関等） 全国の公立劇場とのネットワーク構築に努めており、他館と連携した公演事業の実施や、職員研修に他館から講師を招聘するほか、当財団の専門人材を他館や大学へ講師やアドバイザーとして派遣する取り組みを行っている。また、周辺大学からの学生のインターン受け入れや、地域団体と連携・協力した事業の実施にも積極的に取り組んでいる。 （５）ＰＤＣＡサイクル 当財団では助成の趣旨を理解し、劇場のミッションを実現する事業を計画し（Ｐ）、計画に基づき、劇場職員、アーティストが協同し事業を実施する（Ｄ）。その後、来場者・参加者からのアンケート調査や、関係者からのフィードバック、外部からの評価をリサーチし、（Ｃ）、次年度以降の事業をどう発展させていくか検証し、継続事業については見直しを図る（Ａ）。このような体制のもと、持続的に発展する劇場として運営を行っている。